

# 正徹本改行区分から読む徒然草

長 橋 祥 子

## 1、「隨筆」徒然草の読まれ方

これまで、「隨筆」としての徒然草は、大きく四つの方向で読まれてきたことができるだろう。

- ・ 儒仏老荘的立場からの教訓書としての読み<sup>1</sup>。
- ・ 自然主義文学における文学観に裏付けられるような、作品が作者の真摯な「経験と思索の結晶である」という読み<sup>2</sup>。
- ・ 所縁放下を述べた章段、無常觀を述べた章段、趣味論について述べた章段、有職故実を書き留めた章段、人間像を書き留めた章段というように、各章段の題材に注目した読み<sup>3</sup>。
- ・ 作品内容の理解に、作者来歴や作者が直面したであろう歴史的事実を活用する読み<sup>4</sup>。

これらの読み方の根底には、結局、作者たる兼好が実際に鎌倉末期の世で見聞きし直面した出来事や知識、風俗があり、その折々の場面で考えたことをそのまま書き記したものであるという作品理解があるのであるだろうか。そこから多くの読者が享受したのは、読者の現在には失われつつある、王朝的文化の有様であったり、有職故実的知識であったり、また、読者の時代に隆盛を誇る儒仏的価値観であったり、近代的私小説が金科玉条の価値としてかかげた知識人としての作者のありのまま

の葛藤・告白であったりした。各時代の読者達が求めた知識や思想が、徒然草から享受された。江戸期以降流布本である烏丸本や、この烏丸本によって多く発行された注釈書から浮かび上がる「隨筆」徒然草は、そういった読者の作品享受の在り方を示している。

しかし、それはあくまで、烏丸本による作品享受のありかたであって、四系統ある各写本を見ると<sup>5</sup>区分の様相や区分数が写本によって大きく異なる<sup>6</sup>。また、大きな本文移動<sup>7</sup>や語句・本文の異同も多い<sup>8</sup>。

もし、本来の『徒然草』がこの現行区分や本文ともつと異なっているものだとしたら、それでも現在のような作者が見たことと聞いたこと得た知識を、多少の潤色をくわえながらも、基本的にはそのまま書いたとする作品理解や、文化や知識、卓越した思想を享受しようとする「隨筆」徒然草の読みは可能なのだろうか。

各写本の区分実態や本文異同を確認して、わかってくることは、江戸期の流布本である烏丸本はあくまで江戸期の読者が本文をどのように読んだかという一つの読みの事例であって、それは、『徒然草』と言う作品が、もともとそのように読まれる

ことを目指して書かれたということと直結しないということである。

調査を進めるうちに明らかにになってきたのは、作品がいったいどうゆうものなのかといったジャンルに対する認識<sup>9</sup>や、文章の読み方自体が<sup>10</sup>、鎌倉末期及び南北朝の入り口に生きていた作者の意図するところと江戸期の読者とは、かなり異なっているのではないかとことだ。そこから浮かびあがってくるのは、読者の種々の知識的欲求や思想的渴望を満足させる博学の書としての徒然草ではなく、作者と読者のコミュニケーションの成立を目指して作られた創作物としての「徒然草」である。

一様に、烏丸本を底本とした本文によって行われている感のある現在の作品解釈だが、四系統ある写本を代表する四写本を成立順に並べると、正徹本、常縁本、東大本、烏丸本の順となる。東大本は細川幽齋の子息、細川幸隆他、数人の筆によって書写されているのでひとまず除くとして、他の3写本間の本文異同を確認して明らかになってくるのは、烏丸本の本文はどうか、最古の写本である正徹本の本文と、それに続き正徹本と比較すると随分大きな本文移動や異同がある常縁本の本文を合わせもって、成立しているようだとことだ<sup>11</sup>。

つまり、写本を検討した結果、成立年代から考えて烏丸本の原形の一つとして最古の写本である正徹本が考えられる。正徹本は、烏丸本以前の徒然草の姿を知る鍵となる可能性がある。本稿は、この正徹本の改行区分の意味を考えることを切り口にして、『徒然草』に対する新たな読みを提示しようとするものである。

## 2、正徹本改行区分

拙稿「『徒然草』の構成について―写本区分からの再考―」では、各写本の区分実態を調査した。写本においては現行のような章段区分によらず、「●」や「/」といった墨点と、改行区分による区分が行われている。正徹本は「●」印の朱墨点と改行区分の併用によって本文が区分される。しかし、調査の結果、改行区分と「●」印の朱墨点は必ずしもワンセットで用いられて区分を示しているわけではない。前の文章が行末でつまり、次の文章が次行の行頭からはじまるような、改行の曖昧な箇所にも、多くの朱墨による「●」印が付けられている。そして、このように続けて読もうとすれば続けて読むことができるが、行頭に「●」印がつけられている箇所は、そのような条件の箇所になら必ず付けられているのではなく、現行章段区分において区分されている箇所に限られているのである。

このような実態から、「●」印は後世に、現行区分に準ずる基準から付けられた物であり、改行区分こそが、本来の正徹本における区分である可能性が高いということが明らかになった。今回は、そういった、区分が曖昧な箇所につけられた「●」印が本来の正徹本には無いものと仮定し、改行区分のみを正徹本の区分とした場合、はたしてどんな解釈が可能かということの検証を試みる。

〈表1〉は正徹本改行区分を現行区分と比較したその実態を示したもので、整理番号を一番左の列に示した。また次の列に、現行区分と比較して区分せずにまとめているところにはAを、現行区分にはない区分を入れているところにはBの記号を付し

〈表1〉

1	AB	序段と現行1段間の区別をひとまとまりとし、現行1段を四つに分ける	22	A	現行106段～108段をひとまとまりとする
2	A	現行7段8段9段をひとまとまりとする	23	A	現行110段～113段を〃
3	A	現行10段11段をひとまとまりとする	24	A	現行118段と119段を〃
4	A	現行20段と21段をひとまとまりとする	25	A	現行124段と125段を〃
5	A	現行22段23段24段を〃	26	A	現行126段と127段を〃
6	A	現行28段29段30段を〃	27	A	現行134段～136段を〃
7	A	現行31段32段を〃	28	A	現行137段と138段を〃
8	A	現行39段40段を〃	29	A	現行143段と144段を〃
9	A	現行42段43段を〃	30	A	現行145段と146段を〃
10	A	現行53段54段を〃	31	A	現行147段～149段を〃
11	A	現行56段57段を〃	32	A	現行152段と153段を〃
12	A	現行59段60段を〃	33	A	現行166段と167段を〃
13	A	現行63段64段を〃	34	B	現行175段を二つに分ける
14	A	現行67段～69段を〃	35	A	現行180段と181段をひとまとまりとする
15	A	現行71段72段を〃	36	A	現行190段～193段を〃
16	A	現行73段～75段を〃	37	A	現行195段と196段を〃
17	AB	現行80段を二つに分け、79段と80段前半を80段後半と81段をひとまとまりとする	38	A	現行203段と204段を〃
18	A	現行82段83段をひとまとまりとする	39	A	現行206段と207段を〃
19	A	現行84段85段を〃	40	A	現行208段～210段を〃
20	A	現行90段と91段を〃	41	A	現行217段と218段を〃
21	A	現行97段～99段を〃	42	A	現行232段と233段を〃
			43	A	現行237段と238段を〃
			44	A	現行239段と240段を〃

て、一見の便宜を図った。現行区分にくらべて、区分を入れている箇所よりもひとまとめとしてある箇所が圧倒的で、こういった箇所は全体で44箇所、その中には、現行章段における2章段をひとまとめたという範囲にとどまらず、3章段分に及んでいる箇所が多く見受けられる。以下、なぜ正徹本では、そのような大きな区分に成ったのか、本文に即しつつ考察してみたい。

例えば整理番号2の、現行第7～9段は正徹本ではひとまとまりである。この箇所を検討してみる。下の図は正徹本本文をなるべく写本そのままに再現したものである。変体仮名は現代仮名に改めた。一行の字数は写本そのままである<sup>13</sup>。説明の便宜上本来は付されていない現行章段番号を本稿で付した。

ことなりとそよつきの翁の物語にはいへる  
 聖徳太子の御はかをかねてつかせ給けるにも  
 こゝをきれかしこをたて子孫あらせしと思ふ  
 なりと侍れるとかや (改行)

7 ●あだし野、露きゆる時なく鳥邊山のけふり  
 たちもさらてのみすみはつるならひならはいか  
 物のあはれもなからむ世はきたたけなきこそいみし  
 けれ命ある物を見るに人はかりひさしきはなし  
 かけろふのゆふへをまら夏の蟬の春秋をしら  
 ぬもあるそかしつくとひとと、せをくらすほどに  
 たにこよなうのとけしやあかすおしとおもは、  
 千とせをすくすとも一夜の夢のこ、ちこそせめ

すみはてぬ世に見にくきすかたをまらえてなにかはせむいのちなかければはちおほしなかくともよそちにたらぬほどにてしなんこそめやすかるへけれそのほとをすきぬればかたちをはつる心もなく人にましはらむことをおもひ夕の日に

子孫をあひしてさかゆくすゑをみむまての命をあらましひたすら世をむさぼる心のみふかく

8

●世の人の心まよはずこと色欲にはしかず人の

心はおろかなる物かなほひなどはかりの物そかししはらく衣裳にたき物すとしりながら

えならぬ匂にはかならず心ときめきする物なりくめの仙人の物あらふ女のはきの白をみて

通をうしなひけんはまことに手あしはたへなどのきよらにこえあふらつきたらん外の

9

色ならねはさもあらむかし女はかみのめでたからむこそ人のめたつへかめれ人のほど心はへなどはもの

いひたるけはひにこそものこしにもしらるれことにふれてうちあるさまにも人のこゝろをまど

はしすへて女のうちとけたるおもねす身をおしとも思たらすたゆへくもあらぬにもよくたへ

しのふはた、色をおもふかゆへなりまことに愛着の道そのねふかく源とをし六塵の衆欲

おほしといへとも皆厭離しつへし其中にた、かのまとひのひとつやめかたきのみそ老たる

もわかきも智あるもおろかなるもかはる所

なしと見ゆるされは女のかみすちをよれるつな

には大ききもよくつなかれ女のはけるあしたにて

つくる笛には秋のしかかならずよるとそいひつたへ

侍るみつからいましておそるへくつ、しむへきは

このまとひなり

(改行)

現行区分における第七段は、人間ほど長生な生き物はいないのに、「飽かず、惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心地こそせめ。」<sup>14</sup>と述べられる前半が印象的である。「まだ若さを失わない感傷的な心が、人間の無常に心のたかぶりを感じて、とらせた表現と考えてよいだろう。」<sup>15</sup>とあるように、これまでの解釈では、現行第7段は、無常の発見に主眼があると解釈されてきた。そして、これまでこの段が次に続く第8・9段の色欲について述べる段とのつながりを論じられることは無かった。もしくは、磐齋抄にも「此段は○佛道修行も○色欲がさはりとなるこゝろ也○<sup>16</sup>」とあるように、無常観と色欲という別々の話題が連続して並んでいることに対して、その理由を読者は佛道を志す作者が日々折々に考えたことを書き付けたものだからと考えることで納得してきた。各段の書かれた理由を作者自身の履歴に求めてきたのだ。つまり、これまでの実際の作者たる兼好の日々折々の感慨という解釈、理解が成立するためには、むしろここは区分されている方が都合がよい。しかし、正徹本はこの部分をつなげてひとまとまりと解釈している。その区分の背景にこの部分に対するどんな解釈を想定できるだろうか。

現行区分における現行第7段は、正徹本によって、次の色欲についてのべた二つの章段と合わせてひとまとまりであるという表示を受けた。そこでクローズアップされてくるのは、むしろ前半の無常についての述べる部分よりも、後半のこの世を常住と思ひ「夕べの陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、ものあはれも知らずなりゆく」のような常住を願う姿の記述である。

この部分で述べられる子孫を愛する姿とは、我が子の行く末に幸多かれという人の親としての自然な感情の持ちようや姿ではない。「ひたすら世を貪る心のみ深く」と表現されるように、我が身の常住を願ひ、子孫の行く末の繁栄までも確かなものにしよとするような武家政権の世襲制や撰閣政治などの負の側面を想起させる。自己の権力の拡張や永遠の安泰を図るその象徴として、「夕べの陽に子孫を愛」する姿が、ここに登場していると言えるだろう。

それは、男性が、女性の個性や内面というよりは、衣服にたきつけられた香りや肉体美やその他の文化的装置に惑わされる姿について述べる現行8・9段と、本質的な人間関係の構築に失敗し、他者の支配に走るような人間の在り方について述べると言う点で共通する。

正徹本の区分は権力をもった存在が他者とのコミュニケーションに失敗したすら我が身の利益や拡張にばかり躍起になる姿について述べているということで共通性を認め、この現行7・9段をひとまとまりと判断したということが言えるだろう。さらに、前の現行第6段部分で自分の墓をつくるときに、

「こ、を切れ。彼処を断て。子孫あらせじと思ふなり」と言った聖徳太子の発言と、7段の「夕べの陽に子孫を愛」する姿勢への批判というつながりを考えるなら、7・9段のみならず、6段も含めた、現行6・9段は、そうした自己利益の追求に抑制を欠いた姿に対して、批判的な態度で展開した部分であると読むことができる。そして、それは更に人間の権力誇示やこの世への執着の象徴としての家居について述べる現行10・11段にスムーズにつながってゆく。

さらに視野を広げて、この現行6・9段を第1段からの展開のなかで考えてみたい。第1段部分を皮切りとして、人間として生まれたからには「あらまほし」き事について、次々に列挙してゆくなかで、まず願わしい身分や姿・形・心様・才能について述べられ、次に身分が高いからといって「万にきよらを尽」す態度についての見苦しさと美麗を求めないつましい為政者の理想の姿のべられ、恋については「色好まざらん」わけではないが「ひたすらたはれたる」ようではない恋愛姿勢についての理想が述べられる。次に、仏道に決して疎くないかといって、いたずらに出家してしまうのでもない抑制のきいた姿を理想とし、その展開の先に、おごれる者が自己利益拡張の願望に惑う姿に対する批判であるこの現行6・9段が位置するのである。

つまり、正徹本の改行区分によって、本文を読むのであれば、あらまほしきことは、身分が高いとしても決しておごらず、たとえ容姿や心様や才能勝れて居り女性にもてたとしてもひたすら恋愛におぼれるというのでもなく、世を捨てることも常に

視野に置いていような、世を喰らなへかっこいい理想の生き方の模索というのが、第1〜9段の一貫した筋として存在するといえることができるだろう<sup>17</sup>。

さらに正徹本は整理番号3、続く第10段と11段もひとまとまりとしている。家居について語る10段の前半には「大方は、家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。」とある。続く後徳大寺大臣と西行のエピソードは寢殿に張られた縄を見て西行が「鶯のみたらんは、何かはくるしかるべき。この殿の御心さばかりにこそ」と怒って二度と大臣の下へ来なくなつたといふもので、家居にこそ、その人の心様や人格が現れるということの実例がここで挙げられているように思える。後徳大寺大臣の自分のものは少しの利益も施さぬような他の生物に対して無慈悲な本性が家居の有様から浮かび上がっている。しかし、其の次に挙げられる綾小路の宮が自分の住んでいる棟に縄を引いた例は「鳥の群れあて池の蛙をとりければ、御覧じかなしませ給ひてなん」という生物保護の正統論に叶うものだった。徳大寺にもどんな事情があつたのだろうといふところで、現行第10段は終わっている。

現行のように、このエピソードのあとで区切られていれば、どうしてもこの部分は「住まいの外観には、そこに住む人の人柄が如実に表れることをまず述べておいて、ただし、外観からだけではわからないという例も引く。まことに一律にはゆかぬのが世の中だ。」<sup>18</sup>というような、前半に述べられたことを、後半で覆すような、非一貫性が目につく部分となつてしまふ。しかし、正徹本は続く現行11段も、10段とひとまとまりと

する。すると、生物保護の正統論に守られた綾小路の宮の行いが、11段の表向きは「あはれ」に見えた庵の仏者が庭の柑子の木をさびしく困い、自らの庭に生じる利益が他者の手に渡ることを阻止しようとする行いとオーバラップする。綾小路の宮の生物保護の正統論も、その自己の利益に固執する本性を隠すために表向きを飾つた行為なのではないかという考察の余地が生じてくる。

こうしてみえてくると、正徹本の現行7〜9段をひとまとめとする区分と、現行10段・11段をひとまとめとする区分は、あらまほしい理想の生き方の模索というテーマによつて作品を読んだときに適切なものとして理解できるといえる。

正徹本で読む徒然草は、まず非常に一般的な知見からスタートする。身分高く、顔がよく、心様がすぐれ、才能がある、それが理想であるというところから始まる。しかし、たとえ身分が高く顔がよく才能があつて女性にもて、世の中が自分の思い通りになつたとしても、それを傘にいばりちらし女性におほれるようでは見苦しい、後の世を視野にいれ仏道に暗くないような抑制の取れた姿勢が望ましい。現行6〜9段で為政者が常住坐臥の自己拡張の欲望に惑う姿を否定的に描く。そしてそれは、住む人の本性が現れる家居のあり様に対する関心につながり、家居に注目することで自分の理想を分かち合う人が、なかなかいないのが実態だといふ現実のむなしさに直面する現行10段・11段につながる。以後、抑制のとれた理想の生き方は何かを求めて書物や和歌や自然の世界に目をむけ、栄耀栄華や人の生のはかなさに思いを馳せ、それはやがて毀誉褒貶や名利に

よつて見えにくくなつてゐる現実の看破という展開につながつて行く。

### 3、かけ離れた話題をまとめる区分

現行区分では全く話題につながるがない、かけ離れた話題とみなされ区分されてしまつてゐる箇所を、正徹本ではひとまとまりとしてゐる。そのようなケースを先の表によつて確認すると、整理番号9・12・15・17・20・21・22・23・26・29・41があげられるだろう。

そのうちのいくつかを見て行こう。整理番号9番、現行第42段と43段を正徹本ではひとまとまりとする。次にあげるのは、正徹本における該当本文である。

見て目をくらすおろかなることは猶まさりたる  
物をとひひたれはまことにきにこそ候けれども  
おろかに候といひてみなうしろをかへりみてこ、へ  
いらせ給へとて所をさりてよひいれ侍にきかほどの  
ことはり誰かは悪よさらさらむなれとおりからの思ひ  
かけぬ心ちしてむねにあたりけるにや人木石にあらねは  
時にとりて物を感することなきにあらす (改行)

### 42 ●唐橋中将といふ人の子に行雅僧都とて

教相の人の師する僧ありけり氣のあかる病  
ありてとしやうたくるほどに鼻の中ふさ  
かりていきもいてかたかりければさまにつくろい  
けれとわつらはしくなりてめまゆひたひなどもはれま

とひてうちおほひければものもみえずにのまひの  
おもてのやうにみえけるかた、おそろしにおそろしく  
鬼のかほになりて目はいた、きのかたにつきひたい  
のほとはなになりなとして後はその中の人にも  
みえずこもりゐてとし久くありて猶わつらはしく  
成て死にけりか、る病もあることにこそありけれ  
43 ●春のくれつかたのとかにえむなる空にいやしからぬ家の  
おくふかく木たちふりて庭に散しほれたる花見  
すくしかたきを入れてみれば南おもてのかうしみな  
おろしてさひしけなるに東にむきてつまどのよき  
ほどにあきたるかみすのやれよりみればかたち  
よけなるおとこのとし廿はかりにてうちとけた  
れと心にく、のとやかなるさましてつくゑに文を  
くりひろけて見ふたりいかなる人なりけんたつ  
ねきかまほし (改行)

### 44 ●あやしの竹のあみどのうちよりいとわかき男の

月のかけに色あひきたかならねとつや、かなるかり  
きぬにこきさしぬヒツきいとゆへつきたるさまにて  
さ、やかなるわらはひとりりをくしてはるかなる田の  
中のはそ道をいな葉の露にそほちつ、わけ行

現行42段行雅僧都の氣のあがる病のエピソードと現行43段のかたちよげなる男がひとり家の内で机に文を広げている様子  
子の描写は、前者が説話的章段19、後者が王朝的章段20と目される  
場面、一見なんや両段につながりが見えない。この箇所

が、正徹本においてひとまとまりとされている。

正徹本がなぜこの部分をひとまとまりとしたか。前出拙稿<sup>21</sup>ではその共通点に注目した。気の上がる病で籠もらざるをえなくなつた行雅僧都とかたちよげなる二十ばかりの男、随分状況は異なるものの同じく籠もれる者ということに共通点がある。さらにこの現行42・43段について考察を進めたい。この現行42・43段の箇所だけを見てみると、それ以上はひとまとまりとする理由が見あたらないように思えるが、前段である現行41段の内容と後に続く現行44段を踏まえてみると、42段と43段をひとまとまりとする意味がさらに鮮明になる。

現行41段は五月五日の賀茂の祭りに物見の群衆のなか、木の股で居眠りをし、落ちそうになつて目を覚ます法師の姿を描写している。その姿を見て人は笑うけれど、死がいつ訪れるかもしれないのに、それをすっかり忘れて祭りをみて日を暮らす群衆と何やかわりがないという内容である。

従来この段は「くらべ馬の見物に集まつてきた雑人たちが、兼好の一言に深く共感したのは、彼らの心の底に、死はいつやつてくるかわからないという気持ちだが、潜在していたことを物語っている。<sup>22</sup>」というように、作者の迫れる死に対する達見が披露されて、それが雑人の心を動かしたという点に注目が集まつてきた。しかし、達見の披露ということと同時にもう一つの部分で行われているのは、誰もが笑ってしまうもしくは顔をしかめる愚かな法師の姿が、それを見て笑っている祭りの群衆の姿と同じものであるということの看破である。

これは42段の行雅僧都が鬼の顔のようになる病によつて籠

もる様子と43段の春の暮れつかたに美しく若い男が屋に籠もる様子という一見かなり様子の異なるものの記述をひとまとまりとする区分意識にそのままつながる。

そこにあるのは、二の舞の面のような怖い形相の僧都が籠もることも、見る者の目を引くような美しい若い男が一人籠もることも、一見大きな差があるようだが、若く美しいものにも、同じく死は迫り、病で顔が腫れ満ちて鬼のような顔になつた僧都にも、同じく死は迫っている。美しい若い男が籠もること、鬼の様な顔の見るも醜い僧都が籠もること、ピジュアルや世間の持つイメージは随分異なるが、死の到来の前には、また籠もるという行為においては、日頃人目を引くような外見や背景の違いに意味はない。籠もれる行雅僧都の病の悪化とやがて訪れた死は、若い美しい男の籠もる姿と重ねられることで、ここでは日常の平穏な暮らしの中で、もしくは外見の美しさのために見すごしがちになる現実を讀者に突きつける役割を果たす。

晴れの祭りを見ようと思つてそこに居るのになうとうとしていりどうしよもなく間の抜けた者も、しっかり祭りを見ようとして目を見張っている者も、実は一見懸け隔たるもののように見えて、木から落ちるときになつて、もしくは死という現実を前にして、やつと目が覚める、自分の愚かさに気がつくという点で大差がない。木の股で居眠りをする法師は、若い二十ばかりの男の現実を浮き彫りにする行雅僧都と同じく、祭りを見るという行為に埋もれて見えなくなつていく現実を突きつける役割を果たしている。

現行41段、そして42・43段の眼目が、死が常に眼前に



迫っているということの発見ではなく、実は見た目の美貌や花やかさ、評判に埋もれて見えなくなってしまうているものごとの本質の看破にあるとすると、続く44段で、若く身分が高く風流であつて世俗的に誰もがうらやむような宮が、誰が見ているでもない山里で、しめやかに仏事を営むその様子を描いている理由も無理なく読み解くことが出来る。見る人も少ない山里で仏事を営む宮は自分の優美な見た目や何不自由ない境遇に惑わされずに、物事の本質を見据える存在なのだ。もしくは、世間からみれば何不自由ない境遇でありながら、内側に、世間的な幸せを謳歌できない、不具なる事情を抱えた存在なのだ。

そして正徹本改行区分から気がつく、この現行41〜44段部分を貫くテーマは、さらに視野をひろげるなら、少なくとも現行38段から続いていることに気がつく。38段は「名利につかはれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむこそ、愚かなれ。」という一文で始まり、財産や地位や名譽に惑わされることの愚軟な姿勢を活写する現行39段、非常に評判の美貌でありながら栗ばかり食べる娘のエピソードである40段も、世評や外見に紛れてみえない実態をうきざりにするこの路線から読み解くことの出来る話であることに気がつく。

また、44段のあとにつづく現行45段は世間から付けられるあだ名に腹を立てて、つまり、世評に振り回されてなんとかそこから逃れようと悪戦苦闘する良覚僧正の話である。世評の軽薄さを浮き彫りにするエピソードであり、38段から44段の展開はこのエピソードにスムーズにつながってゆく。

こうしてみてみると、これまでどういった意図をもつてそこに書かれたのが不明であつた、もしくは、作者の勝れた人間観察や独特の懐古主義を表現したとしか解釈できなかった説話的、王朝的と目されるこれらの章段も、正徹本改行区分においては、世評や見た目の花やかさといった表皮に埋もれて見えにくくなっている現実の看破というテーマがここにあり、そのテーマの展開、深化のために呼び出された話として理解することができるのである。

先に見てきた冒頭からの展開をうけて38〜44段部分にあたる本文を考えると、世を貪らない、抑制のとれた良い男とは何かというところからはじまり、実際にはなかなかそのような理想を実現した存在がいないうことに幻滅し、理想の生き方の模索が始まる、書物の世界に目をむけ、和歌の世界、自然の世界、人間の生や栄華のはかなさ移ろいやすさに目をむける。そんな中で、現行33段に登場する玄輝門院が閑院殿の櫛形の穴の形状を正確に記憶している有職故実のエピソードは、たやすく変遷するものに対して変わらず伝承されてゆくものの存在を訴え、そこから肉体は朽ち果ててもその人の死期にも心に残るような人と人との真の交流とはなにか、本当に大事な物はなにかというところ、に話題が発展し、やがて、名利や人の聞きに惑わされない生き方の模索へと展開する。その名利や人の聞きに惑わされない生き方の模索のなかで、現行38段から45段は登場するのである。

さらにこの後の展開を探るべく、正徹本ならではの「一見話題のかけはなれた部分をひとまとまりとする区分をさらにみてゆ

く。整理番号12番、現行59段と60段をひとまとまりとしてゐる箇所は、59段が「大事を思ひ立たん人は、去り難く、心にか、らん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり。」という一文から始まる。いわゆる所縁放下を説く章段である。そして、続く60段は芋頭好きの盛親僧都の、決まりにとらわれない、自由な生き方を活写する章段である。この二段を正徹本はひとまとまりとする。正徹本の区分を頼りにすれば、「いかなる大事あれども、人の言ふ事聞き入れず、目覚めぬれば、幾夜も寝ねず、心を澄ましてうそぶきありきなど、尋常ならぬさまなれども、人に厭われず、万許されけり。」という盛親僧都の生き様は、自分の「大事」のために、世俗的に「去り難く、心に」かかつてしまうことを、捨てて生きる生き様の具体例であると読むことができる。

そして、その生き方は、まさに38段以降の展開である、名利に惑わされない、自己の本質である「大事」を見つめて生きる生き方の一例でもある。

59・60段を38段から続くテーマ展開のなかで考えてみよう。39段、法然上人の自然体な念仏を勧めるエピソードから、40段栗娘のエピソードを経て、41〜45段の部分においてなされた実は世評や外見に惑わされて本質がみえていないのではないかということの看破から、現行46段は強盜法印が強盜をする法印ではなく実は強盜にあつたために強盜法印とよばれるようになったというエピソードを載せる。続いて流布本とは異なり、正徹本ではこの46段のあとに現行223段が移動している。223段は鶴大臣が鶴を飼っているから鶴大臣と

呼ばれるのではなく、幼名が鶴君だったから鶴の大臣と呼ばれているのだというエピソードが登場し、巷に存在するニツクネームの誤読を浮かび上がらせる。45段榎木の僧正のニツクネームのエピソードと同じく、続く二つのエピソードも世評の無責任さ、あてにならなさを浮かび上がらせる。

続く現行47段では老女が迷信にしたがって幼い養ひ君のために「くさめく」とつぶやき続ける様を描いたエピソードをのせ<sup>23</sup>、48段ではそれとは対象的に光親卿が女房の批難も顧みず有職の振る舞いをして院に賞賛をうけるエピソードを載せる。続く49段では昔ありける聖が「人來りて自他の要事をいふ時」、「今、火急の事ありて、既に朝夕に逼れり」といつて耳をふさいで念仏をし、ついに往生するというエピソードを語ることで、人からの評判やうけを気にせず、自らの道を進む姿勢について述べ、50段で「応長の比」の誰もみたことのない鬼の噂に右往左往して、混乱をさわめる群衆の様子を語り、51段以降、決して派手ではないが自らの道を知る水車名人のエピソードと、対照的な世間の基準に沿いたいもしくは人にうけたい気持ちに振り回されて大失態を演じる仁和寺の法師達の逸話などを経て、55〜59段は名利や世俗の評価に惑わされない生き方の具体的な在り方の模索に展開している部分である。その展開のなかで60段に続く。

60段に登場する盛親僧都は、睡眠や食事の時間などの、規律や習慣といったいわゆる世に定まった形式にまったく従わないわけだか、そこから、61段の後産の時に甌を落とす習慣の由来や、62段のおさなき延政門院の父を慕う心を現す形式で

ある文字の形への注目、63段の正月の仏事である後七日に武者を集めるその形式に対する危惧など、いわゆる形式や決まり事の由来への関心へと展開してゆく。

そして、現行67〜70段は、まず67段が業平・実方という大歌人を祭った岩本社・橋本社に百首の歌を手向けた今出川院近衛のエピソードを挙げ、続く68段、67段で朝な夕な大根を食べていた功德で大根の兵士が押領使をまもつてくれる話、法華読誦の功德で豆や豆がらの對話が聞こえるようになった性空上人の話など、いわゆる日夜、根拠ははっきりしないものの、繰り返す信仰的な行為によって何事かの力を得るという、事実かどうかを疑うような話が並ぶ。

そして、70段は清書堂の御遊に際して、名器牧馬の柱が落ちていたる危機に琵琶の名手藤原兼季が冷静に対処する話である。普通に考えれば柱が一つ落ちたことに特に深い理由があるとも思われないが、神秘のない話に対して、衣被の女が「寄りて、放ちて」元のように置いたという神秘を付け加えるような、根拠のあやふやなあやしい尾ひれの話末が付けられる。

確かに楽器の名手の底力を感じさせるエピソードではあるものの、琵琶の名手であれば実は常にこのような用意があることが予想される。しかし、この話末によって、用意した者のチェックが甘く年代物の楽器の注が落ちてしまい糊づけして難をのがれたという話に、まるで悪鬼、悪神が名人の技によってしりぞけられるような神威性が付加される。世間に出回る名人譚に付加される怪しい神秘の存在がここで浮かび上がる。

整理番号15番、続く現行71段と72段も正徹本改行区分

ではひとまとめとされる。次にあげるのは正徹本における該当本文である。

かりけりいかなる意趣かありけん物みけるきぬ  
かつきのよりてはならてもとのやうにをきたり  
けるとそ  
(改行)

71●名をきくよりやかて面影はをしはからる、こ、ち  
するをみるときは又かねておもひつるま、のかほしたる  
人こそなけれむかし物かたりをき、てもこのころ  
の人の家のそのほにてそありけむとおほえ  
人も今みる人の中におもひよそへらる、はたれ  
もかく覚ゆるにや又いかなるおりそた、いまの人  
のいふこともめにみゆるものもわか心の中にか、る  
事のいつそやありしはとおほえていつとは思ひいて  
ねとまさしくありし心ちするは我はかりかく思ふにや  
72●いやしけなる物ゐたるあたりにてうとおほき  
す、りに筆のおほき持佛堂に佛の多き

前裁に石くさ木のおほき家のうちに子むま  
このおほき人にあひてこと葉のおほき願文  
に作善おほくかきのせたる多ていやしからぬは  
ふ車塵つかのちり  
(改行)

73●世にかりたりつたふることまことはあひなきにやおほく  
はみなそらこと也あるにはすきて人はものをいひ  
なすにましてとし月へさかあもへた、りぬれ

71段は「想像と現実との食い違いや錯覚の心理について<sup>24</sup>」72段は「賤しげな物づくし。」と目されるように、やはり一見、両段に話題としてのつながりは見えない。しかし、現実を看破しよりよい生き方を模索するという冒頭からのテーマの進展、深化のために各叙述が書かれているとすれば、この部分は人間という生き物の物事に対する認識のあやふやさ、そのよくな人間にあつて、住まいに調度が多く、硯に筆が多く、前菜に草木が多い、則ち持ち主の願望の多さが感じられるような「成り上がりの好み<sup>25</sup>」がどれだけ現実をみえにくくするかというところが述べられる部分として一まとめであると読むことが出来る。

名人のサクセスストーリーがまるで信仰による神秘譚のように現実を歪められたものなのではないかということ、またその神秘性が、人間の現実に対する認識のあいまいさや思いこみ、願望の多さから作りだされたものなのではないかということを示唆して、73段の「世に語り伝ふる事、まことはあひなきにや、多くは皆虚言なり」で始まり「あるにも過ぎて人は物を言ひなすに、まして、年月過ぎ、境も隔りぬれば、言ひたきま、に語りなして、筆にも書き止めぬれば、やがて定まりぬ。道々の物の上手のいみじき事など、かたくななる人の、その道知らぬは、そざるに、神の如くに言へども、道知れる人は、さらに、信も起こさず。」という虚言考につながるのである。

島内裕子校訂・訳『徒然草』では、鳥丸本を底本とした現行本文で読む作品を、次のように捉える<sup>26</sup>。

徒然草は誰に読んでもらおうとして書かれた作品か、という疑

問が呈されることがしばしばあるが、冒頭からこのあたりまでを読み進めてくれば、兼好が、誰か特定の人物を念頭に置いて徒然草を書き始め、書き綴っていったとは、とても思えない。政治であれ、恋愛であれ、住まいであれ、これほど現実に対して、失望感や懸隔感を抱いている人間が、誰にみせようとして、「心にうつりゆく由無し事」を書き綴げようか。相手を意識しないからこそ、連想のひろがりも、また、突然の転調も、自在にできるであつて、この書き方のスタイルは、徒然草の最後まで、一貫している。

たしかに、現行区分から読む、徒然草は作者自身の精神の軌跡の結果生じてきた「連想のひろがり」や「突然の転調」によつて、筆を進めているように読める。しかし、それは、正徹本改行区分によれば本来ひとまとまりとされていた部分が、話題ごとにおつ切れにされ、各記述をそこに呼び出しているテーマが見えなくなつてしまったからだ。

磐齋抄や各写本によつて章段間に「切れ」「続き」と言つたへ読みのゲーム<sup>27</sup>が展開されたのも、話題や題材によつておつ切れにされた本文を、もともと独立し完結したばらばらの文章として読み、その話題と話題の間にある近似性や距離感を読み手各自がそれぞれに解釈した結果だ。つまり、テーマを進展させ深まって進んでゆく統合体としての作品の、素材配列というものに注目した場合、そこに、素材内容どうしの近さや遠さ、すなわち「切れ」や「続き」が見られるということである。テーマにそつて展開している徒然草は本来一つの有機的な統合体であつて、前の部分の展開から次の部分の展開がありさらに次

の部分の展開がある。テーマの深化、展開という観点から見ると、徒然草に切れ目はない。

現行区分から読めば、作品は相手を意識せず、突然の転調や連想のひろがりによって、筆を進めているような体である、また、素材に注目して構成を考えれば、「雑纂」という形式で「不具なるこそよけれ」の美意識によってまとめられているように見える。しかし、実はそこには確たるテーマとそのテーマの進展、深化による展開が存在するのである。各記述は「そこはかとなく」自由きままにあてもなく、「不具なるこそよけれ」の美意識のもとに書かれているようにみえながら、実際は展開するテーマから、けして逸脱することはない。

少なくとも正徹の目の前には、このような現実を見つめた人間らしい生き方とは何か理想の生き方の模索という一つのテーマによってつながって展開してゆく徒然草が存在し、正徹はそのつながりの意味を適切に理解し書写校合を行ったということが、本稿で行ってきた現行第1段から73段における改行区分を切り口にした本文の再検討によって予想されるのである。

## 5、まとめ

読者は文化的知識や思想の享受といった要望を以て、『徒然草』という作品を読んだ。本来、作品全編を貫く一つのテーマをもっていることが予想される『徒然草』であるが、このような読者の要望によって、テーマの存在が理解されず、テーマ展開のために呼び出された話題や素材のみが注目されたことで、ここに、『徒然草』が実際に作者が見聞きしたことの記録とそ

れに対する意見の提示や批評であると言う読者の作品理解が成立したのである。

また、その読者側の一方的ともいえる要望や作品理解が、作品に素材によって本文をぶつ切りにする区分を生じさせ、長短、内容さまざまな話題の羅列される「随筆」徒然草が生じたと言える。

しかし、正徹本改行区分から読む徒然草の各話題や記述は一つのテーマに基づいてその深化展開のために、そこに呼び出されているものだ。これが作品の全編を貫いているとするならば、作者の過去の記憶や現実にあつたことの見聞、もしくは当時の社会における作者自身の日々の精神的葛藤の記録というような、作者という現実存在の直面した鎌倉末期から南北朝初期の文化的現実や事件、そこから持ち得た知識・思想をそのままに記した博学の書として『徒然草』という作品を読むことは出来ないのである。

1 江戸期注釈者の先駆けである『徒然草寿命院抄』をはじめとして江戸期の多くの注釈書にみられる姿勢である。

2 波沼瓊音『徒然草講話』(p. p. 9) 一九一四年一月二八日発行 東亞堂書房。小松尚『参考徒然草新釈』一九二八年五月二十六日発行 大同館書店。

3 有精堂『徒然草講座 第一巻』や「国文学解釈と鑑賞」など学術雑誌の徒然草特集などにおける項目立、文学辞典における内容の記述からも明かであるように、徒然草における題材に注目

した読みは、現在、徒然草の読み方の一つのスタンダードとして浸透している。

4

橋純「『日本古典選』一九四七年一月二十五日初版発行朝日新聞社。松本新八郎「徒然草その無常について」『文学』二六巻―

一九五八年一月。西尾実校注『日本古典文学大系 方丈記

徒然草』一九五七年六月五日第一版発行岩波書店。安良岡康作

『徒然草註釈 下巻』一九六八年五月二十日初版発行角川書店。

高乗勲「徒然草の制作時期考」『日本文学研究資料叢書 方丈記・徒然草』所収一九七一年七月十日発行有精堂出版。

『徒然草』の写本は正徹本系統・常縁本系統・幽齋本系統・烏丸

5

本系統の四系統に分類される。桑原博史「徒然草本文批評の方法」『国語と国文学』東京大学国語国文学会一九六六年八月、齊

藤彰「徒然草の伝本」『国文学解釈と鑑賞』第62巻11号一九

九七年九月に詳しい。

6

拙稿「徒然草」の構成について―写本区分からの再考―「上

越教育大学国語研究」第25号二〇〇九年二月では、「正徹本」

は「徒然草へ上」静嘉堂文庫蔵 正徹筆 一九九八年三月二十

日四版第一刷「徒然草へ下」静嘉堂文庫蔵 正徹筆 二〇〇三

年三月二十日四版第一刷、「常縁本」は古典文庫第一九〇冊「つ

れづれ草 常縁本上巻」一九六三年五月二十日発行、古典文庫

第一四九冊「つれづれ草 常縁本」一九五九年十二月二十日発

行、「東大本」が勉誠社文庫35『徒然草細川幸隆本 上』一九

七八年二月二十日発行勉誠社文庫36『徒然草細川幸隆本 下』

一九七八年二月二十八日発行、「烏丸本」が『烏丸光広本 徒然

草』一九九四年三月二十五日再版発行勉誠社のもを調査した。

7 常縁本には大きな章段移動がある。その独特の配列がどのよう

な読みを可能にするかということについては、「常縁本徒然草を

読む」山極圭二「文学」vol.5 一九八七年一月岩波書店があ

る。また、正徹本には現行第223段が、現行第46段と47

段の間に移動している。

8

正徹本には脱文も多く指摘される。注4に既出『徒然草へ上』

静嘉堂文庫蔵 正徹筆』解説では、親本の形態や脱文について

の考察がなされる。本稿は、正徹本の脱文は、脱文ではなく

元々本文になかったものが、正徹本以外の他写本で後世の校注

者によって付け加えられたものと考える。

9

「随筆」というジャンルから「徒然草」を見ることの矛盾の指摘

と「徒然草」がどんな方針で執筆されていたかの論考としては、

稲田利徳「徒然草」における兼好のジャンル意識『徒然草論』

笠間書院二〇〇八年一月五日第一章第一節所収がある。日記

でも歌論書でも記録物でも説話集でもない「徒然草」の執筆方

針が明らかにされている。

10

森田良行「徒然草」を主題とした文章論の展開「言語活動と

文章論」明治書院一九九三年三月七日発行では「随筆」として

の「徒然草」の文章構成を「記」と「述」という観点から明ら

かにしている。

11

一例を挙げれば現行172段の烏丸本本文「色にふけり情にぬ

で〇行をいさぎよくして〇百年の身を誤り〇命を失へるためし

〇ねがはしくして〇身のまたく久しからん事をば思はず〇すけ

るかたに心ひきて〇ながき世がたりともなる身をあやまつこと

は〇若き時のしわざ也〇」という箇所は、正徹本の「色にふけ

りなさげにめて行をいさきよくして百年の身をあやまりてまたくひさしからむことをはおもはずなき世かたりともなるはわかき時のしわさなり」という本文と常縁本の「色にふけり情にめて行をいさきよくして命をうしなへるためしねかはしくして身のまたく久しからむことをおもはずすけるかたに心引てなき世かたりともなる身をあやまつことはわかき時のしはさ也」という本文を合わせて生じたものと読むことが出来る。

12 注4に既出の『徒然草へ上』静嘉堂文庫蔵 正徹筆』『徒然草へ下』静嘉堂文庫蔵 正徹筆』による、以下正徹本本文はこの影印本による。

13 写本の行末は筆写のためにそろっている。

14 西尾実・安良岡康作校注「新訂 徒然草」一九二八年二月二五日第一刷発行。以下現行本文はこの岩波文庫による。

15 新潮日本古典集成『徒然草』木藤才蔵校注一九七七年三月十日発行〔p28〕第七段頭注。

16 『加藤馨齋古注釈集成』長明方丈記抄・徒然草抄』有吉保編一九八五年一月十日発行新典社。

17 『源氏物語』の主人公源氏の人物造形と徒然草第一部の内容の共通点に対する考察である中野貞文『徒然草』第一部と光源氏「日本文学」日本文学協会二〇一〇年六月十日では、徒然草の第一部が「在俗の者の視点から書かれていることを看過すべきでない」と指摘する。

18 ちくま学芸文庫『徒然草』島内裕子校注二〇一〇年四月十日第一刷発行〔p37〕第一〇段評。

19 説話集と徒然草の説話的章段に対する考察には、西尾光一「説

話文学小考」教育出版 一九八五年十月発行『徒然草』における説話的発想」がある。

20 王朝的と呼ばれる章段についての考察としては、注8既出。稲田利徳『徒然草論』笠間書院二〇〇八年一月五日第一章第三節所収「徒然草」の虚構性」がある。

21 注4に既出。「6、正徹本改行区分の分析」において同箇所を考察した。

22 注13に既出。新潮日本古典集成『徒然草』木藤才蔵校注〔p62〕第四十一段頭注。

23 岩波文庫による現行本文では第47段の文末は「有り難き志なりけんかし」と結ばれるが、正徹本では「わりなき心さしなりけむかし」となっている。老女の行いに対して現行本文のように肯定的な見解を示さない。

24 新日本古典文学大系39『方丈記 徒然草』岩波書店一九八九年一月十二日久保田淳校注〔p148〕第七十一段、第七十二段の脚注。

25 注13に既出。新潮日本古典集成『徒然草』木藤才蔵校注〔p91〕第七十二段頭注。

25 注16に既出。ちくま学芸文庫『徒然草』〔p11〕第12段評。

27 下西善三郎『日本の作家100人 兼好』勉誠出版二〇〇五年七月十日発行『II徒然草』〔p・p・206-216〕

(平成十四年修)